歴史学

田中（たなか） 彰（あきら）

下松市

（1928～2011）

【著作】

『明治維新政治史研究』（昭和38・青木書店）
『幕末維新史の研究』（平成8・吉川弘文館）
『岩倉使節団の歴史的研究』（平成14・岩波書店）
ほか

昭和三年（一九二八）三月、山口県都濃郡末武南村（現・下松市）に生まれる。山口県立徳山中学校を卒業し、陸軍予科士官学校に入校。陸軍士官学校の時、昭和二十年（一九四五）八月十五日の終戦を迎えた。この敗戦体験が、「その後の私の人生観・歴史観の原点になった」と語っている。

陸軍士官学校解散後、郷里に帰り、徳山市立第三中学校に勤務した。歴史学に関心を持ち、昭和二十四年（一九四九）東京教育大学文学部史学科入学。さらに大学院に進学した。この間、社会経済史学会の昭和三十一年（一九五六）大会で、共通論題「藩政改革と明治維新」の山口藩を報告するなど、明治維新研究者として活躍を始め、藩政文書を用いて実証的に分析する新しい研究を切り開いた。

昭和三十七年（一九六二）都留文科大学助教授となる。昭和三十八年（一九六三）、それまでの研究をまとめ、『明治維新政治史研究』（青木書店）を刊行した。本書は、三十五歳の時の著作で、討幕派の形成過程を詳細に解明して、その後の学界に多大な影響を与えた。

昭和四十年（一九六五）北海道大学文学部助教授となり、昭和四十七年（一九七二）同大学教授。昭和四十九年（一九七四）から翌年まで米国ハーバード大学東アジア研究センターへ招聘され、その機会に『米欧回覧実記』の研究に携わり、岩倉使節団の回覧したあとを追跡調査した。また、インドネシア大学に滞在中には東南アジアの土地になじみ、現地を踏む研究の重要性を身をもって実践した。これらは、『米欧回覧実記』（岩波文庫全五巻）の校注に結実した。この中で、岩倉使節団が、米欧の「大国」もさることながら、「小国」に深い関心を持って洞察を試みていたことを解明した。「小国主義」の視点は、「大国主義」となって終戦を迎えざるをえなかった日本近代史を批判する視座となり、敗戦を研究の原点とし、平和と不戦を訴える歴史観につながっている。

平成三年（一九九一）北海道大学を退官、札幌学院大学経済学部教授となり、平成十一年（一九九九）まで勤めた。平成四年（一九九二）、山口県史編さん事業が発足すると、副会長として編さんを軌道に乗せるのに尽力した。平成十九年（二〇〇七）、体調に配慮する必要から勇退した。平成二十三年（二〇一一）十一月九日、逝去。

（文・三宅紹宣）

『山口県史 史料編 幕末維新』（全7巻）

著書